

第9回審議会意見等の分野別整理

1 第6次青梅市総合長期計画原案について

要点	意見要旨
基本構想について	「青梅市のあらましとまちづくりの歩み」(P5)を始め全体的に句読点や重複した言葉、「また」といった表記が多いので、文章をもう少し整理をしてもっと楽に読めるようにした方がいい。
	「本市の特性」(P6)について、「都市基盤・産業・観光・雇用においては」の中で「集客能力の高いイベントも多数あります。」という表現がある。確かに集客力はあると思うが、ここで問題となっているのは、この集客力が下がっていることだと思うので、この表現では、問題がないように読めてしまう。
	「市民の期待」(P8)について、本文が全くないので、市民の期待としてここに位置付ける理由があるのだから、どのように整理して表現していくのかが必要である。
	「まちの現状と認識と課題」(P10)について、課題が書いてある部分と方向性として書かれている部分が混ざっている。課題と方向性という形式でもう少し整理した方が分かりやすいのでは。
	「本市の特性」(P6)について、「都市基盤・産業・観光・雇用においては」で「集客能力の高いイベントも多数ある」と書いてあるだけで、観光客数が落ちていることが表現されていないところは修正が必要。
基本計画総論について	「財政見通し」(P33)について、目標人口を将来人口の推計より多く設定している中、人々が青梅にきて安心して暮らせる、少なくとも財政的に将来に希望が持てるような、そういう街であるというような数字で、これがどうしたら実現できるかということを書いてあるべき。10 年後に青梅市としては、このような施策によって財政改善を図るといったことを記載しないと、絵に描いた餅になってしまうと危惧される。
施策連動型のしくみについて	「施策連動型のしくみ」(P137)について、何かが生み出されるようなものを目標に設定し、部署の垣根が取り払われ、そこに全力で取り組むようなになればと思う。もう少しボリューム的であって、市民の方に分かりやすいようにしてほしい。
	ぶらっとフォーム(P137)の説明が 1 ページしかないがどうなるのか。前回審議会の資料では具体的なテーマの例示があった。この取組の課題は、うまく連動できるテーマを設定すること、テーマに対応した仕組み、人材をどうしていくかという点なので、できるかどうかは別にしてテーマ、人材、仕組みに関しては例示した方がいいと思う。
	施策連動型の施策展開ということ、ぶらっとフォームと言っても普通は分からない。基礎や土台と言ってもなかなか分からない。プラットフォームが何なのかと考えると、ハードとソフトとの間にあるもので、例えば、お金と情報ということで、ハードはインターネット、ソフトは全国の商店であり、それを組み合わせ

要点	意見要旨
	せることで儲けを生むようなものがあるが、もう少し市民に分かりやすくうまく説明していただきたい。 ぷらっとフォームについては、元々は様々なことを議論する場を設けるという意味だと思う。この使い方を整理する必要がある。
計画策定について	私の経験だが、市民も参加して、これだけ踏み込んで計画策定をしているところはそんなにはないと思う。
計画の周知について	総合長期計画は150ページ位になっているが、この内容をどうやって市民に理解してもらうかが大切なのでは。第5次計画では必要な方に有料で配布していたと思うが、それでいいのか。少なくとも青梅市に住む6万世帯にこれが青梅市の10年間の計画だとアピールする積極性があってもいい。とても費用がかかるかも知れないが市民に伝える方法を考えてほしい。 計画書を配布しても読まない人は読まないで、何らかの活動に取り組んでその成果が出てきたときに広報する方法もあるのでは。

2 分野別事項

(1) 自然・安全安心・生活・環境

要点	意見要旨
森づくりについて	「森林」(P48)について、基本方針で「企業との連携や」という表現があるが、基本施策では、特にそれに関する記述があまり明確には出ていない。具体的な取組やどういう企業との連携をイメージしているのか教えてほしい。 「森林」(P48)について、企業とも連携して森林の育成に取り組んでいて、10年前と比べると闊葉樹(広葉樹)が増えていると思うが、闊葉樹(広葉樹)が増えるとクマが出没しやすくなるのではと思うが、実際はどうか教えてほしい。
防災について	「防災・消防」(P37)について、現状と課題で「立川断層帯地震における青梅市の被害の規模は、今までの多摩直下地震に比べ最大震度7の」という表現があるが、何を比べているかわからない。誤解を生む表現ではないかと思う。 「防災・消防」(P37)について、災害対策といったくりにしていった方がいいと思っている。一つは防災として、将来起こるかもしれない災害に対して備える観点、もし災害が起こってしまった時の観点で分類していくのがいいのではないか。災害が起こってしまった場合に、青梅市が被災地になった場合、他が被災地となった場合のすみ分けをして、そこに向けて今後5年、10年かけて対応策を考えていくことを提案させていただく。防災対策と災害後対策といったくりにしていった方が、その先の計画が作りやすいのでは。

(2) 教育・文化・スポーツ・交流

要点	意見要旨
これからの図書館のあり方・機能強化について	「図書館」(P70)について、図書館を1つの施策分野にしたことは評価したいと思う。特に分館とのネットワークについて、青梅の地勢的な条件、交通条件から、各地区の連携が難しい街と印象を持った。しかし、医療もそうだが、こうした図書館の機能で、どこの地区でも平等に市民があまねくサービスを受けられることは望ましいと思う。
	「図書館」(P70)について、前回の審議会資料では図書館が生涯学習の中に位置付けられていたが、今回、1つの項目で掲げている。しかし、生涯学習にとっても、図書館は重要な位置を占めるので重複してでも生涯学習の中で触れておく必要があると思う。
	「図書館」(P70)について、施策分野として独立させたことは良いと思うが、その中で表現されるのは、在来型の本を並べて選んでもらうだけの図書館ではなく、様々な世代の方々が集まり、情報発信や集約する機能も含めて便利に使えて、市民の意見が聞けるような図書館になればと思う。
	図書館については、色々な言葉遣いがある、図書館と言わず情報交流センターといった表現をしている例もあり、情報発信や交流が行える場所であることがわかるよう「図書館(情報交流センター)」といった表現はできないか。
	「図書館」(P70)について、中央図書館が河辺にできて利用者が倍増したことはとても評価している。それをさらに発展させて情報ステーションになってほしい。10年後には、図書館の機能のほかに、青梅の情報ステーションで情報を求める人がそこに行けば情報を得ることができる、生活情報も含めた窓口となり、24時間営業で、新産業の企画会議がそこで開かれているような場になってほしいと思う。ネーミングもあるが、情報ステーションに図書館を育てていくような目標を定めてほしい。
	図書館について、河辺駅前に中央図書館を整備して利用者が倍増した理由は何なのか。その分析は今後の施策展開に重要だと思うが。
	図書館について、図書館が情報交流ステーションとして生まれ変わり、情報発信ができてより多くの人に来て、情報が集まるといったシステムが発展して行けばいいと思う。
青梅らしい教育の実践に向けて	「学校教育」(P61)について、前回審議会で教育の現場において、問題解決型だけではなくて、開発型という思考を取り入れた教育についての提案があったが、もう少し大きな目標を掲げてほしいと考える。例えば、実際の社会の中、あるいは世界で通用する、コミュニケーション能力を高められるといった教育体制を検討し、青梅の教育現場に子どもを預ければそうした能力が身に付くといった目標設定があってもいいと思う。それに向けてどういう教員を確保していくのか、これまで社会で活躍していて定年になった方などに教育の現場に入ってもらい、これまでカリキュラムで作られたものではなく、地

要点	意見要旨
	域力の中で教育の分野に取り入れてもいいと思う。
心の教育について	「学校教育」(P61)について、基本施策「学力・体力の向上」で人権教育が表現されているが、「心の教育の推進」で記載されるべきではと思う。「心の教育の推進」では、不登校やいじめが起こった時に対応することが書いてあるが、起こる前の予防教育ということで、人権教育をしっかりといていじめや不登校をなくす予防という教育の文章を入れてほしい。 「学校教育」(P61)について、基本施策「心の教育の推進」で「スクールソーシャルワーカーの活用を検討」と記載があるが、現在、スクールソーシャルワーカーがいないのであれば、「導入」という表現にした方がいいのでは。
文化・スポーツ活動への支援体制	「歴史・文化・芸術」(P68)について、文化的な活動、歴史・芸術・スポーツ活動を進めるには資金が必要と考えるので、活動している人を積極的に支援するといった文言を記載した方がいいのではないかな。

(3) 福祉・子ども・健康・社会保障

要点	意見要旨
心の健康づくりについて	5 章または 6 章になるのか、心の病に対する対応について、自殺者が相当多いという現状を踏まえた場合、人々の心を軽くするような施策として 1 つの項目を立てて記載してはどうか。
暮らしやすいユニバーサルデザインのまちづくりに向けて	第 6 章について、ユニバーサルデザインという言葉が一般的な言葉として受け入れられてきている。色々な本を読む機会がありその中でユニバーサルデザインは、あまり障害者の立場から考えて作られていないらしい。都市計画の専門家が障害をもった段階で検証したり、医師が障害をもって検証したときに使いやすくないらしいとわかったとのこと。可能であれば本当のユニバーサルとは何なのか、本当の福祉とは何か、深く検証していくようなことも必要なのでは。青梅が本当に住みやすいまちを目指すなら、本来のユニバーサルということを専門家等と連帯して、考えていく必要がある。
市民病院について	「医療体制・市立総合病院」(P78)について、青梅市は市立病院を持っており、ほとんどの方が、治療が集束・完結できるということで敬意を表している。 「医療体制・市立総合病院」(P78)、先日新聞報道で市立病院が優良な病院として表彰されている。そのことを現状に書き加えてはどうか。138,000 人という目標人口を達成するためにも、こうした青梅のよさをアピールしてほしいと思う。
新感染症対策など危機管理について	危機管理ということだと、例えば、新型インフルエンザが発症した場合の、発病した方々の隔離の問題、急激な拡散があった場合の対応、あるいは、テロも含めてNBC(核・生物・化学)関係の災害があった場合の除染・除菌の問題など医療体制の中で危機管理の部分を表記してはどうか。

要点	意見要旨
	危機管理にくくると防犯や災害などどこにでも入るので、医学的な点として疫病関係の話が欠けているということなので第5章に位置付けた方がいいのではと思う。とは言っても一市町村の対策には限りがあるが記載しておく必要はある。

(4) 産業・都市基盤・観光・雇用

要点	意見要旨
農地・森林の機能発揮について	「農業・林業」(P92)について、確かに課題は沢山あるが。基本方針で「農地や森林が持つ多面的公益的機能の保全」と記載があるが、農地や森林にはこうした役割があるという多面的な機能を書き加えてほしい。
ウメ輪紋ウイルス対策について	また、PPV(ウメ輪紋ウイルス)の被害がかなり深刻な状況になっているが、基本施策の「安全で多彩な農業生産の施策」において「また、」以降に記載されている。ウエイト的にはついでのような気がする。この対応は早くても5年、10年かかる話であり、ついでにできる話ではないので、1つの基本施策として取り組んでもらいたい。
家畜の防疫体制について	宮崎市で鳥インフルエンザ、その前に口蹄疫の問題が発生し、大量の鳥・牛を殺処分していた。青梅の場合もそうした家畜を含めていないわけではないので、そうした対応について記載してはどうか。
商業活性化について	「商業」(P97)について、青梅市には大型店舗と個人経営店舗があるが、青梅の魅力の1つであるのは、個人経営店舗でかつ対面販売というところにある。商工会議所が取り組んでいる「まちゼミ」という活動の反省会に参加したときに感じたが、お店の名前や場所は知っていても、そこで誰が働いているのか、その店の中身を知らないことが多い。反省会で各店舗の方が互いの顔を知り、横のつながりを作っていくことが非常に重要であり、商店街活性化の一番の近道になると実感を得ている。対面販売の強みは、お客と話したときに、例えば花屋に来たお客にお茶のことを聞かれたら、お茶屋を知っていれば勧められるようなことができる。そうしたことが商店街の強さになるので、そういう部分の計画を立てて支援していくといったような文言を入れてはどうか。 商業について、八王子市の街路整備を手伝った際に、八王子は大きな街なので、商店街の数が多く、他の商店街のことを知らないことが多々あり、全体で何かやろうということがなかなか難しいということがあった。最後に街路灯ぐらい一緒のデザインでやろうと納得してくれた経緯がある。青梅の場合も、そういうお店を探していればどこに行けばいいといった話はあまりないのか。 商業について、青梅の商店街というと商店街は旧青梅町を中心とした商店街が圧倒的な存在感を持っていた。地理的条件があるにしても青梅のシンボリックな文化の源泉でもあり、コミュニティもある旧青梅市街に集中してい

要点	意見要旨
	た。新町や東部地区は工業も含め発展したが、非常に交通利便性もあって大型店が出店して、商店街があまり発展していない。青梅で言うと文化やコミュニティ、青梅市のアイデンティを考えると商店街が必要である。商店街がガタガタになると、かろうじて青梅駅のところでこらえているところなくなると固定資産税などの租税担保能力も低下してしまう。青梅市といえば青梅商店街だし、それ以外のところは郊外型と大きな商店街の周りのコミュニティまたはコミュニティの周りのちょこっとした便利な商店街という形である。 例えば、青梅市に来たときに、青梅らしいものを売っている場所を尋ねたときにお店をいくつか紹介してくれるといったことがホスピタリティなのでは。 他店の紹介をすごく積極的にしてくれるお店もあるが、青梅市全体としてはずっと強くなれると思っていて、まだまだ弱い。「まちゼミ」の反省会で、青梅市内の商店がその場で初めて会って、知らないお店のことを知るチャンスがあった。それが冊子やインターネットに載ったりして少しずつ整理されていくことで強くなってくると思う。今はトータルとなった冊子がない。 「まちゼミ」に参加するという意思を持ったお店のネットワークを商工会議所は大事にしなければいけないと思う。自分のお店に自信があるからこそできるわけで、そのネットワークを商工会議所で使って何かをできるようにしてはどうか。 「まちゼミ」は全国でも取り組んでいるところがあまりないのでPRしてほしい。
青梅の魅力を伝えるシティセールスの展開	シティセールスに関して、青梅の人は売り込みがあまり上手くない。新潟県の長岡市などは1つの課を設置してシティセールスに取り組んでいる。市役所だけではなく商工会議所、観光協会と連帯しながらシティセールスを積極的に展開すれば、それが企業誘致、観光誘致、住民の確保につながっていく。また、シティセールスという概念を、観光という狭い範囲ではなく広く捉えながら、もう少し重点にしてほしい。 青梅市には医療、教育、観光、自然といった魅力がある。そうしたものをどう伝えるのがシティセールスでは。
新たな産業づくりに向けた支援体制	7章の新しい産業や新しい観光のスタイルを作っていこうといった部分でも同様だが、支援をするという体制を10年かけて作っていき、それが10年後に、人材が育成され、システムが構築され、それが青梅市に新たな潤いをもたらす可能性が十分にあるのでそれを10年かけて育てていくということを意識した文言を入れてほしい。
自転車・歩行者にやさしいまちづくり	自転車に乗って少しでも体力錬成に努められる都市整備が必要ではないか。歩行者も自転車も回遊して楽しめるルートを設定してはどうか。青梅までは輪行して、こちらで自転車に乗って回遊できるようになるといい。また、多くのお客に来てもらうためには自転車を安心して駐輪できる場所も必要だと思う。あるいは犬を連れてきたら安心して犬といられるような場所がより多くできるといい。

要点	意見要旨
	自転車は公共交通機関とするのは、誰でも使えるシェアリング自転車として自動車と同様管理をして使うものである。指摘のあった自転車を楽しめるような道を整備することは、日本では道が狭いから頭を悩ませている。 自転車に関連して、道路を整備するのは難しいが、自転車に乗ってきた人が休める休憩所みたいなを設定してはどうかと思う、そういう人はリピーターであり、青梅を無料で宣伝してくれる人なので、自転車に乗りやすいまちとして環境づくりをすれば、道路整備は後からついてくると思う。 自転車で走るとかたまり場といったことは第 8 章で対応し、それが第 7 章の観光でもでてくるところか。
ライフラインの確保	第 8 章について、ライフラインというものを行政が責任を持って市民に提供するというようなある種の宣言。エネルギーに対して、安定して市民活動が営めるようなエネルギーを提供していく策を盛り込んでいってもいいと思う。
地域資源を生かした観光・交流の振興	「観光」(P101)について、審議会委員の方の意見で「御岳山は世界に通じる遺産である」という話があった。確かに御岳山は世界に訴えられるだけの力を持った資源があり 1,000 年を超える歴史、山間の集落が独自の文化を保ってきたなど、ペルーのマチュピチュより深いものがあるはずなので、観光の施策の中で位置付けを明確にしていく必要があるのではと思う。 また、来訪者の観点で言うと、サイクリングで訪れる人やラフティングやボルダリングなどを御岳の自然の中でしている人は多く、かつリピーターである。そうした人をお客として迎えて、御岳エリアが日本の中の聖地であるというような位置付けで観光の施策を充実していくことが重要である。現状そういう人たちにやさしい環境ができていないとは思えない。こういう人たちが毎週のように来て、場合によっては、青梅駅で自転車を組み立ててそこからスタートしている人たちが、青梅の街の中で 30 分でも滞在していただければ経済効果が生まれる。 都心から青梅市にランニングに来て、入浴してという方も結構いる。青梅はマラソンとかをテーマにした健康の街として全面に出すべきという話もある。こうした方への対応として観光案内所に休憩や自転車の組み立てもできるスペースを確保するなど施設を充実することも必要なのでは。 自転車に関連して、道路を整備するのは難しいが、自転車に乗ってきた人が休める休憩所みたいなを設定してはどうかと思う、そういう人はリピーターであり、青梅を無料で宣伝してくれる人なので、自転車に乗りやすいまちとして環境づくりをすれば、道路整備は後からついてくると思う。【再掲】 自転車で走るとかたまり場といったことは第 8 章で対応し、それが第 7 章の観光でもでてくるところか。【観光】

(5) 協働・コミュニティ・行政運営

要点	意見要旨
情報共有・交流の活性化に向けて	「情報推進・活用」(P128)について、メディアを活用するという部分を盛り込んでおいてほしい。青梅市はかなり良いところがあり、雑誌、新聞その他のメディアでもかなり取り上げられている。そうしたメディアにもっと情報を流し、市民が知れるような仕組みをもう少し考えてほしい。 そうしたメディアからの情報で市民の気持ち上がり、まちの活性化につながると思う。例えば、赤塚不二夫原作の映画が最近公開されているが青梅では何の反応もない。あるいは青梅マラソンのスターターであった吉田沙保里さんが金メダルを取ったが何の反応もない。金メダルを取ったときに青梅マラソンのスターターが、庁舎の脇に何か掲示してもいいのでは。メディアの活用に関して青梅市は意識が低い。 また、アナログ的な口コミ的な地域情報ネットワークも重要であり、それを担うのは民生委員や自治会である。例えば自治会をそういった観点から全国に先駆けて改変していくのはどうか。少なくとも検討していつてはどうか。人的情報ネットワークとして、今ある自治会を母体としながら、そこにスピード感を持っていろんな情報が伝わるというような仕組みを検討してはどうか。
情報化がもたらす問題への認識	「情報推進・活用」(P128)について、IT関連のものは目的を達成するためにツールであるという位置付けをきちんとしておくべき。IT化が進んでいったことで目的を見失うことが多々ある。事例で、教育の現場で問題があった場合に、報告書を提出するというルールがあって、IT化で便利になってメールで報告する。教員の方々は、メールで報告書を出した時点で業務が終了したと思うケースが多い。上司もメールが届いたことで読まないで終了と思ってしまう。本来はそのメールに書かれた内容を会議をするなどして改善していこうとするプロセスが重要であるのにそこをしないというケースが、IT化が進んでいくと往々にして起こりうる。大事な目標を見失いがちなので、ITの積極活用ということに集約されてしまうが、目的を達成するために最大限に上手に活用するための手段であるという考え方を文言で表してほしい。これが起こるパターン現場判断がなくなってしまう。現場判断が重視される環境でないと、上司が責任を持って部下を動かす環境でないと、色々な企画などが伸びてこない。
協働体制の確立に向けて	第9章について、様々な提案をする団体がいるが、結論的には行政に頼れないと思うことが多いと思うが、そうではない青梅市になってほしい。市民から良いアイデアが出てきたらそれを受け入れる窓口があり、精査するにしても、積極的に支援していく体制が必要ではないか。 9章について、市役所ができることは限界があるので、市民や団体が全面に出てきて、相互の連携を取り持つことや、支援することが市役所の役割にな

要点	意見要旨
	ることで、活気のあるまちになっていくと思う。